

第4章 ロシア聖歌史の時代区分

実際のロシア奉神礼聖歌史を考察する前に、過去の歴史家たちがどんなアプローチをしたか、その見解を見てみよう。ロシアの教会聖歌史におけるもっとも著名な歴史家は、ディミトリー・ラズモフスキイとワシリイ・メタロフである。また彼らほどではないが、A.イグナチェフ、D. アレマノフがおり、多くの点でふたりの研究を継承した¹。彼らの聖歌史はキリスト教の最初の世紀から書き起こし、1054年のシスマ（教会分裂）に至るまでの西方教会の聖歌史や13・4世紀までのビザンティン教会の聖歌にも簡単に触れ、後の章を988年から始まるロシア聖歌の歴史にさいている。

当時はロシア語で書かれた聖歌の一般史が他に無かったためにこのようなアプローチが必要であった。彼らは概論としてロシア聖歌がビザンティン教会や初代教会の聖歌から派生したことを証明し強調することを重要と考えた。

今日、西側の読者は西方教会の聖歌やビザンティン教会の聖歌の諸側面における書物や論文を英語や他のヨーロッパ言語でふんだんに読むことができる。今では歴史調査を始めるのに初代教会の聖歌の話から筆を起す必要はなく、むしろ正教会が東スラブ地方に最初に成立した時すなわち988年または989年のキエフ大公ウラディミルによる洗礼から始めればよい。この時点までに東方のビザンティン教会にも西方のローマ教会にも七、八百年以上にわたって進化してきたシステム、聖歌と奉神礼の秩序において十分に発達したシステムが存在していた。ビザンティンの儀式を受け入れたスラブ人は、奉神礼の構造も実施の規則も伝統もそっくりそのまま受け入れた。それからのロシア聖歌の発展はギリシア教会と平行線をたどった。ギリシア教会での変更は、いくつかはロシアでも反映されたが、ほかの刷新や変更はロシア教会内にとどまった。

ローマがキリスト教化された時のビザンティウムと同じく、スラブがキリスト教化されると市民生活と教会生活とは「別ではあるが分離し難い」ものになった。またキエフ社会のある階層は当時のビザンティンの文化や文明の多くの要素を受け入れたので、全面的でないにしても部分的には正教またビザンティン教会の文化はロシア固有の文化一般の形成、とくに教会音楽文化を形成する大きな力となった。

当時奉神礼で用いられた言語は話しことばにかなり近かったので誰でも理解できた。そのため日常生活への教会の影響が強まり、少なくとも個々の封建諸侯公国においては教会と世俗の支配者との絆が強まった。時代が下ると話しことばの変化は奉神礼の言語の変化を上回ってしまったが、それでも民衆の大多数が理解できるものだった。テキストの表す

¹ D. V. Razumovskii, *Церковное пение в России* 『ロシアの教会聖歌』3巻、モスクワ: 1867-1869、V. M. Metallov, *Очерк историй православного церковного пения в России* 『ロシアの正教会の歴史についてのエッセイ』第1版 モスクワ n.p.1893 とその後の版、A. A. Ignat'ev 『ロシア正教会の聖歌、16世紀末から18世紀初頭まで』カザン 1916、D. Allemanov, *Курс историй русского церковного пения* 『ロシア聖歌の歴史のコース』第1巻、モスクワ 1912、第2巻 モスクワ 1914

考えはメロディと結び、さらに容易に理解された。

奉神礼聖歌はロシア文化の重要分野となった。11世紀から17世紀まで、教会以外のための音楽、世俗音楽の資料は何ひとつ見つからないことは特筆すべきである。音楽史一般から見てもロシアの音楽文献史はロシア聖歌から始まるといえる。しかしこれまで指摘してきたように、聖歌は固有の法則と演奏スタイルを持ち、奉神礼そのものから不可分である。教会芸術の歴史は俗謡や民謡を規定する要因以外のファクターに依存する。実際18世紀末や19世紀のように聖歌が俗謡と緊密な関係を持ち、大きな影響を受けた時代においても、聖歌の発展は独自のコースを保った。従って聖歌は別の研究分野として独自の研究課題があると見なければならない。

初期段階において正教は外部からロシアに輸入された儀式であったという事実は、そこに属する音楽形態がロシアに以前から存在した異教的形式と異なることを示す。しかし同時に、キリスト教文化が既存の異教社会に持ち込まれた新しい外国（非スラブ）の要素であったということは、新たに輸入されたキリスト教文化に異教の慣行が影響を与えることも可能である。相互作用の結果、ロシア聖歌史はロシアの俗謡民謡の歴史とは異なる基盤に立脚することになった。

ロシア聖歌の研究者の直面する課題は「時代の流れの中で、他の民族や他の教会文化から借りた主な要素は何か、それがロシア聖歌のシステムの発展と本質にどの程度の影響を与えたか」という質問の探索である。

時には、借用要素の影響によって奉神礼聖歌の姿が一変してしまうような事実があったにもかかわらず、聖歌の発展ははっきりしたガイドラインと何百年もの伝統のうちにあったことを思い出さねばならない。礼拝の秩序、さまざまな奉神礼の祈祷書、聖詠誦読やエクフォネシスなどほとんど形が変わらなかった要素から、カノンの聖歌（チャント）、遡って古代の形を探ることのできる最近の形式にいたるまでの音楽要素を組み立てるさまざまな方法である。聖歌者や歌手は奉神礼聖歌の伝統の連続性というコンテキストの中で、新しい形やメロディを作品にとり入れ創造的な活動を行ってきた。

以下をロシア聖歌史の年代区分のためのファクターとして用いる。

1. 音楽写本に見られる言語テキストの特徴（言語の発達は旋律の内容の進化を伴う。）
2. 音楽スタイルと記号論的特徴の相違
3. 奉神礼の秩序の発展と進化（時に退化）
4. 奉神礼の構成と奉神礼芸術に影響した政治的事件

ロシア聖歌の歴史はなかなか複雑である。聖歌の本質に影響を与えた特徴的形態や優勢なファクターは時代によって全く異なる。九世紀にも及ぶ長い歴史を調べるのに、上記のひとつだけを基準においたのでは疑わしい結果しか出てこない。ロシア教会聖歌はこれらのファクターのすべてから影響を受け、さらにロシア外からも様々な影響を受けた。

ここで「影響」と「借用」の区別をする必要がある。「影響」はある種の外国の要素が既存の文化遺産や伝統に部分的に作用することで、全体的本質的に伝統を変えることや古い物を押し出してすっかり新しいものにとって代わられることではない。

「借用」は外国の文化的伝統、外国の産物を多かれ少なかれそっくり植え付けることで精神的な方向転換を示す。第一に「借用」によって持ち込まれるものは完全に外国の形で据え付けられるが、時間の経過とともに借用物はその国の精神的技術的素質によって形を変え固有の文化遺産の一部と見られるようになる。ある要素がもともと外国産かどうか明らかにするには深い分析が必要である。

「借用」や「同化」があったからといって固有の文化遺産の価値が減少することではない。他国やその精神文化との接触は、しばしば目に見えない形で起こり知らぬ間に同化する。外国文化の中からその時代の精神的な必要に答えたものだけが吸収された。

一般的に言ってロシア聖歌史の時代と時代の間にはっきりとした境界線を引くことはできない。以下に示す区分は多少なり年代測定できるデータ的な特徴に基づいて作られたが、系統的にアウトラインを引くための道しるべとしてしか使えない。聖歌の本質にかかわるような変化はある日突然起こるのではなく、むしろ一定の時間をかけて変化する。特徴的な要素は時代区分の境界線の前後に散発的に起こり始める。古い世代の歌手は、すでに確率した形や実施方法を保とうとし、新しい形の受け入れはゆっくりである。次の世代は新しい形を既存のものとして受け入れていく。従って古いものと新しいものが平行して存在する移行期間が起こる。以下に述べる歴史の様々な時期に、古いスタイルが次第に消滅し新しい形に取って変わられていく約 50 年の移行的段階が見られる。

ロシア奉神礼聖歌は長さの異なる二つの時代に大分される。両者の本質的な違いの基本には、様式や技術的特徴、歌い方のタイプやスタイルにとどまらず、考え方そのものの変化がある。両者には奉神礼聖歌の本質と礼拝における機能において根本的に異なる理解がある。二つの時代の境界は明かで 1652 年から 1654 年、ロシア聖歌に革命的变化が起こった。

最初の時代はロシアのキリスト教化から 17 世紀までで、単旋律の時代と名付けることができる。聖歌はもっぱらユニゾン（または平行 8 度）で歌われていた。この時代の終わり近くになって、ポリフォニーが現れる。しかもここに出現するポリフォニーは西ヨーロッパのポリフォニー形式と何の関係ももたない。

二つめの時代は 17 世紀中葉から現在まででポリフォニー合唱の時代と名付けられる。西ヨーロッパの合唱ポリフォニーの主流と本質的に同じ様式的特徴を持つ時代である。

この二つの時代の区分はラズモフスキー、メタロフの著述に見られる。両者とも、第 1 時代を旋律的聖歌の時代(эпоха мелодического пения)²、第 2 時代をパート聖歌の時代(эпоха партесного пения)³と定義している⁴。各時代の時期、主な特徴の点では一致しているが、個々

² D. V. Razumovskii, *Церковное пение в России*

³ ロシア語での партесное пение (パート聖歌) はラテン語の partes (パート) がロシア語化

の期間の特徴、特に第2時代については全体として明らかにされていない。

ラズモフスキー、メタロフは第1時代を文献学的な要素をもとにしてさらに3つの時代に分けた。

1. 古い「話しことばと同じ歌い方」の時代(период старого истинноречия)⁵ 9世紀から14世紀まで。この時期は、半母音ъとьが普通の会話でも発音され、歌においても歌われた。この時代の写本では、他の母音と同じくこれらの文字にもネウマが付された。
2. 話しことばとズレが生じた時代、またはホモニアの時代 (период раздельноречия период хомонии) 14世紀から17世紀まで。話し言葉においてъやьが半母音の性格を失い全く無音化し、あるいは限られた場合にのみ完全な母音として発音された。しかし聖歌本ではこれらの文字の上にもネウマが附加され、o、aのように発音しなければならなかった。そこから発音のズレ、ときにはことばの意味そのものの歪みが起こった。しばしば動詞の語尾は、хомъ は хомо のように発音され、この現象はホモニア хомония として知られる。歌のテキストが誦経の場合とは際だって異なるために「話しことばからの逸脱」と名付けられた。
3. 新しい「話しことばと同じ歌い方」の時代(период нового истинноречия)。ニコン総主教によって行われた1652年から1658年の奉神礼祈祷書の改革に始まる。この時期、歌の時ъやьがo,aのように発音されなくなり、再び、歌のテキストは読むときと同様に発音されるようになった。ホモニアは無司祭の旧儀式派の歌にのみ残された。

メタロフもラズモフスキーに同意しているが、第2時代をさらに2つの期間に細分した。ラズモフスキーの研究は19世紀半ばで終わっているがメタロフは30年後の19世紀末まで行った。両者とも、この時代を特徴づける論拠としてはロシア聖歌に影響を与えた様々な外国の影響をあげている。以下の通り。

1. ポーランド・ウクライナの影響が特に強かった時代、17世紀中ばから18世紀末
2. イタリアの影響を受けた時期、18世紀末から両者が著述を終えた時期まで。

他の歴史家としてはA. V. プレオブラゼンスキイがおり、ロシア聖歌史を5つの時代に区分した。⁶

したもの。主に自由作曲または、実際に作曲され正確に記譜されたチャントのメロディをポリフォニー的に編曲したものに用いられる。耳で聞いて伝えるという伝統的な口伝の方法に対比して用いられる。(参照：第3章 p.102) 後者は простое пение (簡単な歌) と呼ばれる。19世紀の聖歌に関する著述のなかにはパート聖歌を17世紀以降に書かれたすべてのポリフォニー合唱曲に用いる。近年の研究ではこの語は17世紀末から18世紀はじめのポーランド・ウクライナスタイルに限って用いる。現代の研究は狭義の定義を支持する。

⁴ D. V. Razumovskii, 前掲書 *Церковное пение ...*

⁵ V. M. Metallov, 前掲書 *Очек историй...*

⁶ A. V. Preobrazhenskii, *Очек историй церковного пения в Руссии* (『ロシアの教会歌唱の

1. 10世紀から14世紀にかけて
2. 14世紀から17世紀
3. 17世紀
4. 18世紀
5. 19世紀

プレブラゼンスキイの時代区分は異なる基準を用いているのでメタロフ・ラズモフスキーとの一致は一部のみである。彼の第5の時代は主に教会作曲家の伝記的情報を論拠にした。プレオブラゼンスキイは1910年までの調査を行った。しかしその著作の中にはっきりした系統は見つけ難く、どちらかというとなり調査の性格が強い。

ソビエトの学者、N.D.ウスペンスキイは彼の著作『古代ロシアの聖歌芸術』Древнерусское певческое искусство⁷で、ロシア聖歌の発端から17世紀までを検討し、西欧スタイルのポリフォニー聖歌の初期時代までカバーしている。ウスペンスキイは初期ロシアの政治史に基礎を置いて三時代に区分した。

1. キエフ・ルーシの時代。10世紀から12世紀半ば。キエフ大公国がいくつかの封建諸侯に分割されキエフが首都としての特徴を失う時まで。
2. 小さな封建諸侯の時代。
3. モスクワ公国の時代。

このタイプの区分を検討してみよう。ロシアの行政組織の政治的変化は、聖歌史には政治、経済、社会史ほど重大な影響はなかった。この三時代を通してロシア教会は数個の主教区を含む一つの府主教区として（1589年からは総主教区として）の一体性を維持した。教会全体はすべての封建諸侯公国、すべての教区において一つの奉神礼言語、一つの秩序を保った。従って聖歌も地域的なヴァリエーションがあっても一つであった。教会の一体性は外からの政治的条件にはあまり影響を受けなかったため、ウスペンスキイの時代区分は全体的に正しいとは言えない。

かつてキエフ公国に属しリトアニア大公国とポーランド王国に併合された地域（ベラルーシ、西ウクライナ、ガリツィア）の聖歌史はロシアと異なる道をたどった。これらの地域の聖歌史はまだ十分に研究されていない。そのため、現在の歴史調査資料はこの地域がロシアの州として発展する14世紀の始め以降に集中している。同時にロシアの南西部で起こった400年に及ぶ発展の結果は、17世紀なかば以降のロシア聖歌史に革命的と言っていいほどの大きな役割を果たした。

ニコン総主教の奉神礼改革の結果1668年にロシア正教会のヒエラルキーから袂を分かっ

歴史に関するエッセイ』サンクトペテルブルグ Санкт-Петербургское Училище, n.d.) この研究には S. V. スモレンスキイの死(1909)が記載されているので、1910年以前の出版ではなく、ペテルブルグがペトログラードと改名する1914年以前。

⁷ モスクワ Музыка 1965

た旧儀式派の聖歌史もまた全く未調査である。しかし実際には旧儀式派の聖歌に新しいものはほとんどなく、分離直前にあったのと同じ歌が存続しているだけである。つまり、旧儀式派はロシア聖歌史における第1時代の最後の時期の歌を今もそのまま存続させている。

ロシア聖歌の最後の包括的学術的研究から60年が過ぎた。(残念なことに、前述したウスペンスキイの研究は第1時代と第2時代の初期のみしか行われていない)。現在その事実と結論には広範な再検討と補足が必要である。

ラズモフスキーとメタロフによるロシア聖歌の第1時代と第2時代の本質的な相違は大変はっきりしているが、結論を導き出した方法に最近の調査に基づく変更と追加が多少必要である。前述したとおり16世紀半ば以前の聖歌の写本はすべて例外なく単旋律で、二声三声のポリフォニー写本は16世紀の後半になって初めて現れる。しかし、このポリフォニーは器楽音楽の原則に従っておらず、同時代の西ヨーロッパのものとは根本的に異なる。

単旋律と独自のポリフォニーという二つの特有な現象がこの時代の二つの目立った特徴である。このロシア・ポリフォニーはもともとロシアの地でロシアの聖歌者によって発明され育てられたのか⁸、またはもっと早い時代にどこからか輸入されたのかはという違いはこの時点ではそれほど重要なことではない。大切なのは17世紀なかばにおいて突然ロシア聖歌にあらわれたポリフォニーが西欧のものと全く異なっていたという点である。

現代の研究では第1時代を区分する基準として現存する聖歌写本に多く見られる歌い方のタイプを用いる。

1. 第1期：起源の時代。988年からだいたい11世紀末まで。ロシアの洗礼からロシア府主教区内でスラブ語のテキストで書かれた写本が現れるまで。この時代には書かれた写本は存在しないので、この時期の教会聖歌についての結論は多かれ少なかれ推測に頼らざるえない。
2. 第2期：コンタカリア聖歌の時代。11世紀末から13世紀末まで。この時代には2種類の全く異なる聖歌法の手書き写本が平行して存在する。(a) ズナメニイ・チャント—無譜表のストルプ表記が特徴。(b) コンタカリア聖歌、これも独特の無譜表表記をもちいる。ズナメニイはより広範囲に見られる。コンタカリア聖歌はこの時代のみにある特徴で、時代の名称もコンタカリア聖歌に由来する。奉神礼の実施方法から見ると、この時期はコンスタンチノーブル・ティピコン使用の時代である。この時代の大聖堂教会は、コンスタンチノーブルの偉大なる聖ソフィヤ大聖堂の式順を用い、修道院ではコンスタンチノーブルのストゥディオス修道院の式順を用いた。この時代は13世紀中にすでに終息し14世紀になるとコンタカリア表記を記載した写本は見られない。
3. 第3期：ズナメニイ単独支配の期間。すべての写本にもっぱらストルプ表記によるズナメニイ・チャントのみが記載される。奉神礼の実行方法の点から見ると、それまで

⁸ V. M. Beliaev, *Раннее русское многоголосие* (『初期ロシアポリフォニー』) studia memoriae Belae Bartok sacra(Budapest:1956) pp.327-336 英訳 pp.307-326

用いられてきたコンスタンチノーブルの式順に変わり、エルサレムやアトス山で用いられる式順が用いられるようになった。この時代は14世紀のはじめから16世紀のはじめに他の無譜表表記（プト表記とデメストヴェニー表記）が共存するようになるまで。記号学的には、第3期、第4期の境は15世紀から16世紀に変わる頃。

4. 第4期：初期ロシア・ポリフォニーの時代。以前は全く存在しなかった新しい表記の出現とプトとデメストヴェニー聖歌の出現が特徴。（かならずしも単旋律で歌われるとは限らない）またこの時代特筆すべきなのは、ストルブ表記による教科書（アズブーキ азбуки）と、教会の聖歌者と組織された聖歌隊のための学校である。この時代の最盛期は16世紀末で、両者とも17世紀半ばに突然停止し、第1時代そのものが終わる。

第2時代は西欧スタイルの合唱の時代と特徴づけることができる。ラズモフスキーはこの時代を「パート歌の時代」と命名したが、その名称は不適當である。その理由は上記の第3期の記述により明らかである。また、この名称を現在まで続く第2時代全体に当てはめることもできない。この名称は17世紀末から18世紀初期の時期に限ってふさわしい。同様にメタロフはこの時代を和声的聖歌の時代と定義したが、これも全体的に正確ではない。この時代の聖歌作曲のすべてが和声の原則に則って行われたのではなく、自由作曲においても古い正典的メロディの多声化においても、複雑な対位法の原則や模倣的ポリフォニーも用いられた。この時代西洋スタイルの合唱時代と名付けるのが最も妥当であろう。この時代の特徴は、西欧で一般的に用いられていた対位法、和声、形式的構造の原則に則った合唱ポリフォニーにある。第2時代の間、西欧スタイルの作曲テクニックは「ことば」とそれまで熱心に育まれてきた正典的旋律を曖昧にし、凌駕し始めた。その結果、古代ロシアの聖歌の形式も初期ロシアのポリフォニーも成長が止まってしまった。

ラズモフスキーとメタロフは第一時代と同じ原則と方式を用いて第二時代を区分したが、現在の研究では異なる区分を提案する。なぜならラズモフスキーやメタロフが著述を行った時代には、最後の時期の特徴はまだ十分に確立されていなかった。

第二時代の細分には、時代によって異なるポリフォニー合唱音楽に見られる典型的様式の特徴を基準にする。ロシア教会の奉神礼の式順はこの時代までにしっかり確立しており現在まで実質的に変わっていないために、この基準は十分有効である。第2時代、ロシアの社会情勢は激しく変化した。これは合唱の質には影響を与えたが聖歌の本質にはほとんど影響を及ぼさなかった。むしろこの時代さまざまな外国からの影響が大きく作用し、西欧での音楽スタイルの進化全般に追従して、優勢な作曲テクニックや様式への決定的要素となった。

1. 第1期：ポーランド・ウクライナの時代。装飾的多声部合唱「パート партесной」様式、もっと簡単にプロテスタントのコラーレに触発された「カント кантовы」様式と呼ばれる。この時期は17世紀後半から18世紀半ば、もしくは少し後。この時代の始まりとと

もに聖歌は礼拝のそのもの形とではなく、教会の祈りに導入された音楽と見られるようになる。

2. 第2期：イタリアの時代——特にイタリア様式の合唱ポリフォニー。この時代は比較的短く、18世紀半ばから19世紀の最初の三分の一くらいまで。

3. 第3期。ドイツの時代。ロマン主義ドイツ敬虔主義的な感性は強い感情的要素を教会聖歌に持ち込んだ。この時期、サンクトペテルブルグの宮廷付属教会の指導者に引きいられた世俗権力による干渉が増大した。奉神礼に用いる新しい作曲のスタイルが彼らの個人的好みによって決定され、教会の調（エコス・オスモグラシエ）のメロディすら干渉を受けた。この時期はペテルブルグの時代と読んだ方がふさわしいかもしれない。

また、この時期にはロシア聖歌の古文書学、記号学の最初の学術調査が行われ、調査の成果は、部分的には第4期に影響を与えた。第3期は19世紀の三分の二から19世紀末までである。

4. 第4期：モスクワ学派の時期 19世紀末期に始まり、今日まで続く。この時期は、第2時代第3期まで、特に第2期に強く現れた外国の影響と「借用物」からロシア聖歌を解放した。新しい方向性はロシア固有のもの、ロシアの正典的旋律への回帰によって示され、ロシアの民謡の心と固有の感性に結びついたロシアの作曲テクニックの最新の成果を用いて、これらのメロディが取り入れられた⁹。この時期聖歌の指導的な立場はサンクトペテルブルグの宮廷付属教会からモスクワ・シノド合唱団と教会聖歌学校に移る。1917年のロシア革命直前、ロシア奉神礼聖歌の芸術文化的発展は、最高点に達していた。1917年の政治的事件とそれに続く年月はこの芸術のさらなる発達を完全に妨げ、聖歌の伝統の推移と育成を妨げた。1917年以降のソ連内では、聖歌の状況に関する公的情報は信用できる情報源はない。

⁹ ロシアの異教的民謡の固有の特徴と原則 A. D. Kastalskii, *Особенности русской музыкальной системы*, 『ロシア民謡音楽のシステムの特徴』モスクワ、ペトログラード, Музсектор Госидата, 1923